

[報告]

JICA近畿大学連携ボランティア事業

—ペルー共和国野球振興支援ボランティア連携に参加して—

近畿大学産業理工学部経営ビジネス学科

①はじめに

独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency: JICA) は、日本の政府開発援助 (ODA) を一次元的に行う実施機関として、開発途上国への国際的な支援を行っている。「全ての人が恩恵を受けるダイナミックな開発」というビジョンを掲げ、多様な援助手法のうち最適な手法を用い、地域別、国別アプローチと課題別アプローチを組み合わせて、開発途上国が抱える問題の課題解決を支援していくことを掲げている。そのJICAを通じて、短期ボランティアの野球隊員としてペルーへと2013年から派遣されるようになり、今年で6度目の派遣となった。南米に位置するペルーはブラジルの隣で太平洋に面している。南米ということもあり、やはりサッカーが人気のあるスポーツである。野球は日系人の間では人気があるスポーツであるが、国全体で見ると競技人口は約2000人と決して人気があるスポーツとは言えないのが現状である。年々野球人口は増加しているが、まだサッカーなどの人気スポーツには程遠い。また、野球道具の不足や、練習環境もあり整っていないなど野球をする上での課題も多々ある。そのような環境下であるが、ペルーの野球競技人口の増加と、野球技術の向上を目的とし現地で活動を行った。

(茂田雄也)

②JICAボランティアとは

JICAボランティア事業は、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニアボランティアの4種類のボランティア事業の総称であり日本政府のODA (政府開発援助) の一環として1965年に青年海外協力隊が発足して以降、独立行政法人国際協力機構が実施する事業である。

開発途上国または日系人社会からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「現地の人々のために活かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣する。

現地の人々と共に生活し、働き、彼らと同じ言葉で話し、相互理解を図りながら、彼らの自助努力を促進することを特色としたボランティアである。

JICAボランティアには技術系、医療系、教育系、農業系、スポーツ系などの職種があり自分の持っている知識、技術、経験などを生かせるのもJICAボランティアの特徴である。

(橋村佳樹)

③ペルーの歴史

ペルー共和国は先コロンブス期のアメリカ大陸で最も高度な文明が発達した地域であり、判明しているだけでもチャビン文化、ワリ文化とティワナク文化、シカン文化・チムー文化などの五つの文化が考古学的に発掘されている。そのようなペルーの歴史に関して有名なのはインカ帝国が有名どころではあるが、インカ帝国の文化以前にプレ・インカといわれるものがある。プレ・インカは、インカ帝国以前のアンデス文明の諸文化として一括りにされているものの広大な南米大陸の海岸部・乾燥した平野部・多湿な山間部という異なる環境をもつため、地域的な差異も大きい。そして、明確な文字の文化も持っていなかった。15世紀には五つの文化を総合とする存在としてタワンティン・スウが現れた。1533年にタワンティン・スウがスペイン人の征服者のフランシスコ・ピサロによって滅ぼされた後に、スペインの領土となったアンデス山脈一帯はペルー副王領として再編され、リマは南アメリカの西半分を統括した副王領の中心地となったが、植民地時代を通して現在のペルーに相当する地域は徐々に周辺地域と比べた衰退が明らかになっていった。1821年には独立を宣言し1824年に独立を達成したものの内政は安定せず、1879年から1883年まで続いた太平洋戦争ではチリに敗北し、南部の領土を割譲した。20世紀に入っても安定せず経済的にも社会的にも低開発な状態に留まった。近代のペルーの歴史としては1980年代に極めて高いハイパーインフレで深刻な経済危機に陥った。しかし、2000年代にオジャンタ・ウマラ・タッソが主導する民主政治により、現在では高い経済成長の恩恵にあずかり、かつてないほどの成長レベルに達して、過去の危機を克服している。

(武内秀平)

④近畿大学の派遣に至るまでの動き

私たち、短期ボランティア隊員は12月に神奈川県横浜市にあるJICA横浜にて5日間の研修を行った。研修には短期ボランティア派遣隊員約100名が参加した。

研修では、朝から夕方まで講座があった。講座の内容は大きく分けて3つに分類される。「現地での活動手法」、「健康管理・安全管理」、「社会的多様性理解・活用力」の3つ

である。これら海外に行った時に必要になる事、ボランティアに対する心構えなどを学び、レポートの提出と確認テストを受け理解できているかの確認を行った。

講座では海外での安全対策や交通状況、任国での健康管理や感染症について学び、日本とは違う環境での行動の仕方や対策について知ることができた。またグループワークを通じて様々な方々と意見交換をすることで、ボランティアを行う中で大切な知識やチームワークを学ぶことができた。このような5日間の研修を受け、自分の身は自分で守るというセルフディフェンスの重要性、任国での安全に対する知識や準備を約1ヶ月間のボランティア活動を無事に終えた事に繋がった。

(芝吹凌)

⑤ペルーでの活動

私たちはペルー体育庁野球連盟に配属され、リマ市を中心に活動を行なった。今回の派遣において私たち近畿大学の広島、福岡の2学部から計11人が参加した。

私たちが所属する部局の活動内容は総合スポーツ施設における、少年野球の指導、現地のリーグ戦に参加することである。その部局が掲げる課題としては、現地の指導者のノウハウが正しく子供に伝わっていないこと、そして指導している最中の子供の態度、野球をする以前の事に問題があるのではないかと感じ、取り組む姿勢を私たちが1ヶ月で少しでも変えることができるように活動を行った。

午前中18歳以下の指導、午後から8歳未満の子供たちに指導を行った。ウォーミングアップから始まり、バッティング、その後に守備の練習を行った。指導の際一番苦労したのは、言葉が通じないことであった。一つ一つの動作を教える際、ペルーの子供達にわかりやすいようなジェスチャーで教えることを心掛けて行った。

今回のボランティア活動を通して、コミュニケーションの重要性が身にしみて感じた。子供達との関係が深まっていくほど、指導中の態度も変わり、吸収が早くなったことから、信頼できる人から教えられるほうが成長につながることがわかった。指導者と子供達の関係がこれからのペルーの野球の発展に繋がっていくと感じた。

(馬場公康)

⑥AELU (アエル)

AELUとは日系人が創設した総合運動施設である。施設内には野球場だけでなく、サッカー場やフットサル場、テニスコートや屋内外のプール、陸上競技場などスポーツをする上で日本と大差ない施設を整えている。また施設内にはレストランや売店も兼ね

備えており、レストランではそばやカツ丼など日本食も用意されている。他にも日本語の看板や、日本語を話すことができる店員がいるということもあり日本人である我々も困惑することなく充実した生活を送ることができた。

今回の派遣ではAELUを中心に野球の指導を行った。ペルーで選抜された18歳以下の子ども達への指導を主に行い、現地の一般の子供達にも指導をした。練習内容はウォーミングアップから始まり、ノック、応用練習、バッティングの流れで行った。その中で我々近大生はデモンストレーションをして見せたりや、マンツーマンで子供について打撃指導をした。

ペルーの子供達は基本ができていない子が多かったので、基本練習を行う時間を多めに取った。日にちが経つにつれて子供達も基本を理解してくれたので初めて比べ大きな成長を見せてくれた。

また今年も昨年同様AELU主催の大会に参加した。日本のグラウンドとは異なり木製のマウンドや、整備されていない凸凹のグラウンドでの試合だったので心配な部分もあったが、そこにも対応して全員よく打って攻撃からリズムを作り良い展開で試合を進めることができた。初戦から一敗もすることなく優勝できたので本当に嬉しかった。

最後にAELUの施設関係者の方々は、我々近大生を暖かく迎えてくださりとても活動しやすい環境だった。改めてペルーの方々には心からの感謝の意を表したい。

(田口雅人)

⑦CALLO (カヤオ)

CALLOは今回私たちが主に活動をしたAELU同様、野球場だけでなく、サッカーグラウンド、バスケットボールコート、体育館など様々なスポーツを行うことのできる総合運動施設である。

カヤオ球場はAELUの野球場と異なり、外野の芝の整備があまりされてなく打球が転がらないなど苦労する場面が多くあった。また内野グラウンドもあまり整備がされておらず凸凹しており、打球がイレギュラーするなどして、子供の指導、ペルー代表と試合をするなかでプレーがやり難い場面が多々あった。

今回このカヤオ球場は主にIPSAの技術指導とペルー代表との試合で多く使用した。IPSAの指導では、AELUで活動をする時よりも人数が少なく、活動場所が変わるだけで集まる人数が変わるというのも日本とは違うと感じたところである。

(松本大輝)

⑧ペンション カントウータ

私たちが宿泊した施設はホテル・カントウータであった。このホテルは日本人の方が経営しており、朝食は日本食でとても美味しかった。夕食は10ドル払えば作ってくださり日本食を食べることができる。部屋は1人部屋、2人部屋、3人部屋でそれぞれにタンスがあり広さも不自由のない広さだった。お風呂とトイレは共同で全てのフロアにあった。洗濯はホテルの方々が手洗いから干すところまで全てやってくださり、とても感謝している。1階にリビングがありそこのあるテレビでは日本の番組が全チャンネル見ることができた。ホテルにはWiFiもあって、自由に携帯電話も使うことができた。1か月の派遣期間ほとんど不自由なく生活することができた。

(杉本達成)

⑨試合の様子

今回私たちは活動の中で現地のチームと試合をすることがあり、AELUカップというペルーのクラブチームが5チームと近畿大学チームの計6チームで行われる大会、そして、ペルーの代表として野球をしているナショナルチームとの試合を行った。

AELUカップでは優勝したがそれ以上に現地のチームの方々と野球というスポーツを通して国際交流が出来たことがとても良い経験になった。言葉が通じない中、そして勝敗を決める試合であるのに試合が終われば勝手に仲良しになっていてスポーツの素晴らしさを心の底から感じることで、同時に野球ができることにも改めて感謝することができた。

ペルー代表のナショナルチームとの試合では、やはり代表でもあるのでそう簡単には勝てる相手ではなかった。日本人ではないペルーの方々の身体能力の高さに驚いた場面もあった。しかし、私たち近畿大学チームもいろいろと考え日本らしいバントなどを使ったスモールベースボールを敢行し、野球をしていく中でとても私たちの勉強になる試合となった。試合後にはペルー代表のユニホームと近畿大学のユニホームを交換したり南米ならではの指笛を教えてもらったりと試合の後も楽しく交流することができた。

今回の活動の中で現地のチームと試合を行い、交流できたが、一番に感じたことは言葉や文化、まったく異なる環境の人々とすぐに打ち解けあえるスポーツの素晴らしさを実感したことである。これからも野球を続けていくが、今回の貴重な経験を様々な場面で活かしていきたいと思う。

(高島友貴)

⑩まとめ

2012年度から始まったJICAと近畿大学の事業連携は、2016年度で連携事業の期間満了を迎えた。しかし、近畿大学、JICA、ペルーの野球関係者などが現地での活動評価を行った結果、2019年度まで引き続き活動を行うこととなり、今回短期派遣ボランティアとしてペルーで6回目の活動を行った。主な活動の内容は、現地の子ども達への野球の指導、現地チームとの試合、日本人学校への訪問などです。

子ども達への野球の指導では、IPSA (International Peruvian Sport Academy) の選抜メンバーセレクションを行い、選抜されたメンバーへの指導を中心に行った。その他にも、IPSA選抜メンバー以外の子ども達への練習会も行っており、小学校低学年の子ども達も数多く見られたので、通常の練習メニューの他に、ボールに慣れるためのゲームや遊び感覚のメニューを取り入れ練習を行った。非常に短い期間の指導であったが、少ない練習時間を大切に、確実に上達していく子ども達が多く見られた。

また、今年は昨年行えなかったリマ日本人学校への訪問をすることができた。小学1、2年生の体育の授業の中でキャッチボールなどのボール遊びを体験してもらい、5、6年生の体育の授業では実際に簡単な試合形式で野球を体験してもらった。昼休みの後には一緒に掃除をして、放課後には学校の子ども達とサッカーをして遊んだ。言葉が通じるのでコミュニケーションが取りやすくてとても楽しい時間を過ごせた。子ども達もとても喜んでくれ、次回の派遣以降も是非、訪問したいと思った。

こうしてペルーで様々な活動をさせていただく中で、たくさんの方々とのご縁があり、非常に貴重な体験をした。こうした活動で培った知識や経験を多くの方々へ還元することも私達の大切な活動の一つであり、ボランティアの精神や活動の素晴らしさを伝えられればと思う。

今回、私達の派遣に際しまして、ご指導、ご支援いただいたすべての方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

(川口恵大)

